解説：「母と子」－ひとつの人生の話、ひとつの時代の資料

ブイ・ティ・ロアン

少女はまだ8学年なのに、読者の注意を引く作品を書く作家としてすでに有名である。文章の才能は「神童」の質がある。それは誰なのか。どんな環境に生まれたので、そんな才能と成功を授かったのか。読者は、愛読すればするほど、それらの疑問に答えてほしくなる。おそらくそのため、作家チャン・ダン・コアは「母と子」を訪ね、会って話すことで、答えを見つけてあげようとしたのだろう。

「インタビュー」はタインホア市のチャン・ティ・ルー（1946年生まれ）の家で、1998年に行われた。そのとき、彼女の娘のグエン・ザン・ティエンは13歳だった。インタビューの内容は、作家チャン・ダン・コアによって「母と子」の記述となった。それは2001年にハノイで出版された青年出版社の『よく会う人々』の中にあり、約10ページ（13 × 19cm）の長さである。

母と子は、2世代に属する2人の母子であり、現在、20世紀末から21世紀初めの今日の時間の中で、我々とともに生きている。

母は、すでに「退職」した人である。退職金は生活するのに足りず、おこわを売って、彼女のほかに、1人の老人、1人の病人、そして普通学校に通う2人の娘がいる5人の家族を養わなければならない。

母は、対米抗戦の青年突撃隊員であった。さらに小隊の指揮官でもあったが、競争戦士あるいは英雄ではないだろうか。なぜなら彼女は、1968年の半ば、テト攻勢の後に、ホーチミンルートの第14番目の道標のところにある山の洞窟で、第14兵站所が開催した「英雄・競争戦士大会」に出席した正式代表だったからである。

女性英雄は、貧しい農民出身であった。自分の7人の兄弟姉妹や、同郷の多くの人々と同様に、学校に行けなかった。彼女は青年突撃隊が組織した文化補習学級のおかげで、読み書きができるようになった。学歴がないので、現在「失業」しており、おこわを売る商売をしなければならない。彼女は何としてでも、子どもたちを大学まで行かせなければならないと決心した。

彼女の子どもたちは、貧しい生まれの娘たちだが、勤勉で勉強がよくできる。2人とも多くの賞をとったことがあり、その賞は、学習の成績によって、また才能を競う競争などによってであった。最初の成功をおさめるために、「母と子」は非常に多くの努力をして、貧乏や極度の困難を乗り越えなければならなかったが、ザン・ティエンの「文を書く」仕事についての詳細を読むだけで、それがはっきりわかる。

少女は文学が好きだが、本を買う金がなく、本が少ししか読めなかった。文学の創作でも、紙を買う金を節約するため、黒板とチョークを使わなければならない。今日の「母と子」の、貧しさに抵抗する努力は、昔の戦争での必勝精神に劣らないといえるだろう……。

「母と子」の物語は、我々に社会と歴史の多くの資料を提供してくれ、読者を、自分が生きた一時期の雰囲気をもう一度体験させ、あるいは抗米戦争の時期の生活と人間について理解させてくれる。

ルーが思い出させるひとつひとつの出来事は、歴史と結びついた正確な時間・空間・地名を持つ。それは1967年のテトの元日に、豚肉の鍋を吹き飛ばした爆弾である。それはホーチミンルートの第14番目の道標のところにある山の洞窟で開催された「英雄・競争戦士大会」である……。彼女が思い出す死んだ人々は、名前を持ち、明確な経歴を持ち、ルーの記憶の中で、そして多くの親しい人々、同じ部隊の人々、今日生きている人々の記憶の中で生き続けている。

ルーとともにあるのは、貧しい農村の出身で、幼い時は学校に行けず、国が戦争をしている時に成長した人々の世代全体である。彼女らは、平然と、純粋に、戦争に行き、自分の運命と生命を時局に託した。困難

と危険と欠乏の中で、彼女たちは力の限り働き、力の限り生き、「私たちは今は生きているが、明日は死ぬかもしれない」と思っていた。しかし、そう思うことは、気ままに生きるためではなく、よりよく生き、後悔しないように生きるためであった。彼女たちは多くのことを信じることで、力を生み出した。その中には、「爆弾は当たるとは限らないし、当たっても死ぬとは限らない」という、偶然を信じることさえあった。実際、彼女たちは幸運にも死を免れたが、なぜ自分がそんなに幸運だったのか、信じられなかったのである！

過ぎ去った日々の記憶を思いおこすとき、ルーはいつも気軽なふざけた調子で話す。それは、ひとつの時代の人々が担い、乗り越えなければならなかった困難の程度、戦争の苛酷さ、大きな犠牲の数々を和らげるかのようである。

しかし我々は、彼女がおもしろおかしく自然に物語る、具体的な生き生きとした詳細から、理解できることがある。それは、英雄や競争戦士たちが大会に参加した日々に、山菜ばかりの宴会を、「皇帝や女王と変わりない」と喜ぶことである。それは何百人もいる、すぐれた青年突撃隊の女性の一部隊全体への賞品が、数メートルの混紡の布と、4本のゴムサンダルの紐だったことである。それでも彼女たちは、涙が溢れるほど喜んだ。そして彼女の話を聞く者も、きっと心の中で、涙をため、言葉に詰まるのをひそかに感じたであろう。彼女と同じ時を生きたことのある者は誰でも、数メートルの混紡の布の価値がどれほどのものであるか、とてもよくわかる。特に、「服は煙のにおいがして、いつもとても湿っていた」環境にあった青年突撃隊の女性たちにとって……。

作家チャン・ダン・コアと話すとき、ルーはいつも自分の話を「信じがたい」と言い、誰も信じないだろうと言う。まさに、困難に満ち、物質的に欠乏しながら、情感と夢に溢れ、当時の人々の情に富んだその日々を生きたことがなければ、信じることができないだろう。

しかし、それは事実なのである。

ルーの「信じがたい」話は、ベトナム民族が、ルーの世代のような1人の人間の一生に値する長い歴史的段階の間、耐えて経験しなければならなかった戦争での困難な苦しみや、こうむった犠牲と厳しい残酷さの小さな資料であり、精密な挿し絵なのである……。

【片山須美子　訳】